

自衛隊OB

1票点描 参院選2013

▶④

今月中旬、熊本市で開かれた陸上自衛隊のOB会。長崎県佐世保市の出身だ吉弘嘉幸(69)は、いずれも自衛交じりとなった仲間たちとテーブルを開んだ。「良い再就職先が見つかるように、みんなも努力した。」「自衛隊への理解があるように、みんなも努力した。」

旧海軍兵学校の元教官だった高校教師に勤められて防衛大学校に進学し、卒業の、憲法に明記されていない自衛隊。「自分たちの存

傾化」との批判も目立つ。も乗り越えた。

自衛隊の前身の警察予備隊発足から63年。敗戦後、世論が左に寄った。今は真ん中に戻る過程だ。参院選を前に、仲間たちと「右傾化批判」に首をかしげる。

右傾化というけれど

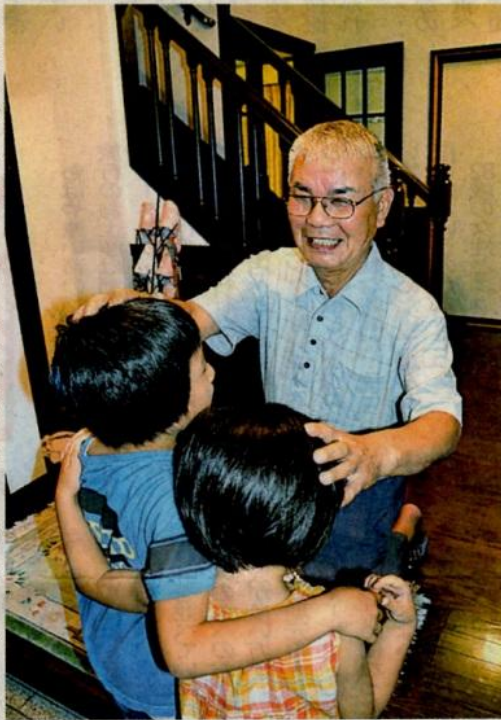
てくれよ。グラスにビール瓶を傾けながら切り出す。自衛官の大半は50代半ばまでに定年を迎える。退職して14年が過ぎた今も、後輩たちが気掛かりだ。

学生運動の全盛期。自衛隊への風当たりは強く、制服で街に出ると「税金泥棒」とのしられることが何度あった。「やるべきことを一つ一つこなしていくんだ」と。4年前、熊本市の健康駐

「尚武の地」と形容される熊本。陸自西部方面総監部、第8師団が駐屯する熊本市は、就業人口の100人に1人が自衛隊関係者と

熱を帯びる。海外からは「右傾化」との批判も目立つ。も乗り越えた。

2世帯住宅の玄関で愛しい孫を迎え入れる吉弘さん。「この子たちの時代にも平和が続くことを願う」



世帯住宅を建てた。共働き「明記」に向け、道筋が見え、冷静に考えられるように娘夫婦に代わり、7歳と5歳の幼い孫2人の面倒を見るのが日課となった。自衛隊員は「みんなが平和で幸せに暮らせるように頑張っている」と、いつか孫たちに誇りを持って言おうと思う。参院選の結果次第で、悲願だった憲法への「自衛隊」を離れて穏やかな日々を送る中で、自衛隊の立場をよ

(向井大豪)